

# スマホ時代の子どもたちのために

兵庫県立大学環境人間学部 准教授  
竹内 和雄

## 1. スマホ時代の子どもたち

ネット依存、ネット上の危険な出会い、高額課金、……。マスコミで、この種の報道はあとを絶ちません。私自身も文部科学省「情報化社会の新たな問題を考えるための児童生徒向けの教材」の作成に関わったり、総務省「インターネットWG」の一員として子どもたちにとって最適なフィルタリング等についての議論に加わったり、警察庁「総合セキュリティ会議」の委員として子どもの性被害等についての対策の議論に加わったりしています。さらに教職員、保護者等に対して、講演会等で話す機会も多いです。私だけでなく、この種の問題に詳しい人の多くが全国を駆け回りながら、「子どもたちの厳しい現状」を伝えていますが、状況は改善しません。

今回は、「出会い系サイト等での性被害等」「ネットいじめ」の2つの視点で、「待ったなし」の状況を記載してみます。

## 2. 出会い系サイト等での性被害等

下のグラフ(図1)は、警察庁(2017)から作成しました。「出会い系サイト規制法」が改正された平成20年から状況が変化しています。この改正で、「インターネット異性紹介事業」を行う事業者は、①事業開始等の届出、②児童(ここでは18歳未満)の利用禁止の明示、③利用者が児童でないことを運転免許証等で確認、の義務が課されました。

出会い系サイトでの児童被害は、平成20年724人から平成28年の42人と大幅減少しました。一方、出会い系サイト以外の被害者は、平成20年792人から平成28年1736人と大幅増加しています。

出会い系サイト規制法の改正が功を奏したのと、警察等の地道な努力の成果だとも言えますが、「悪い大人」が出会い系サイトからその他のサイトに移ったとも考えられます。被害の中心は、出会い系サイトではなく、出会い系サイト以外の普通のサイ

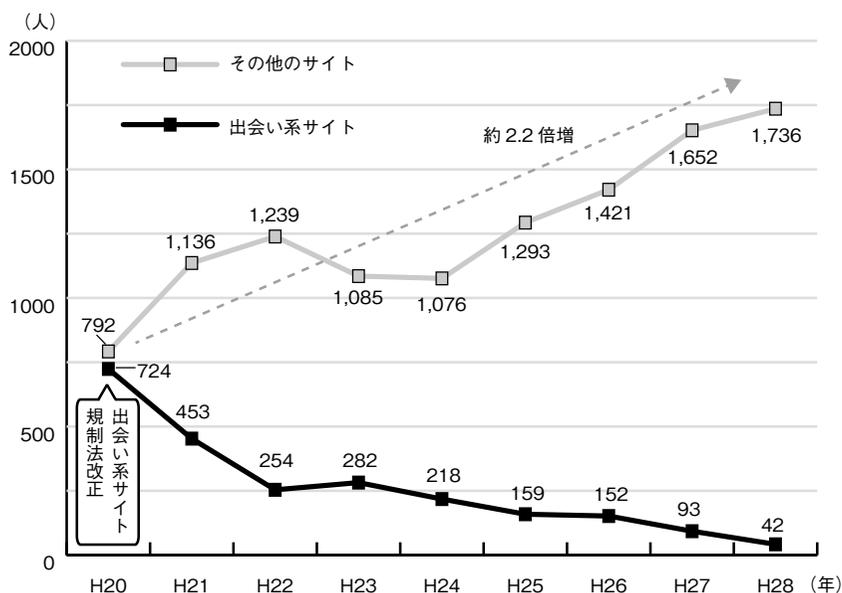


図1 コミュニティサイト等に起因する児童被害数の推移  
(出典：警察庁「平成28年におけるコミュニティサイト等に起因する事犯の現状と対策について」)

トで起こるようになりました。次に、平成27年、28年の被害について記載しています。あまり知られていませんが、実は子どもたちのすぐ近くで被害は起きているのです。

### 3. 被害数第一位は Twitter

下のグラフ(図2)も警察庁の前掲書から作成しました。目につくのは Twitter の被害児童の多さです。平成27年にすでに被害児童数第一位でしたが、平成28年には、前年から97.3%増加し、400人を超えました。半期ごとの被害児童数は、平成27年上半年が85人だったのに対し、下半期は141人。平成28年上半年は180人、下半期266人。他のサイトがほぼ被害数を減らしているのに Twitter の増加は特徴的です。

さまざまな機会に、この惨状を報告してきました。警察庁主催の会議でも委員として発言していますが、なかなか改善されません。Twitter社がアメリカの会社だということが大きく関係しているとの指摘もあります。ここは日本で、被害に遭っているのは日本の子どもたちです。放置できない問題です。せめて、日本の大人はこの状況を知るべきだと思います。様々な統計から、日本の中高生がよく利用す

るアプリは、LINEとTwitterだと言われています。そのTwitterでこのようなことが起こっているのは大問題だと思います。

Twitterで「#援交 難波」で検索してみました。目を覆いたくなるような書き込みがみられました。「ホ別ゴム有2, 無3」。警察庁の担当者等と研究した結果、「避妊具を用いた場合2万円、避妊具を用いない場合3万円(ホテル別)」の意味なようです。こういう書き込みが子どもたちが頻繁に使うTwitterでなされています。ある人は「こういう書き込みは全部、業者がやっけて子どもたちではない」と鼻で笑いましたが、ある警察関係者によると「半分以上が正真正銘の中高生の書き込みの場合もある」そうです。

「援助交際」という言葉がよく使われますが、紛れもなく「売春」です。江戸時代は「遊郭」、その後「赤線」「テレホンクラブ」と変化しましたが、子どもたちの目に触れない、子どもの遠くで行われていました。しかし今はTwitterという子どもたちがすぐに目にする場所で、呼び込み、斡旋が堂々で行われています。こういう状況を放置しているTwitter社の道義的責任は重いと思います。しかし、そこに強い圧力をかけ切れていない私たち日本の大人の責任はもっ

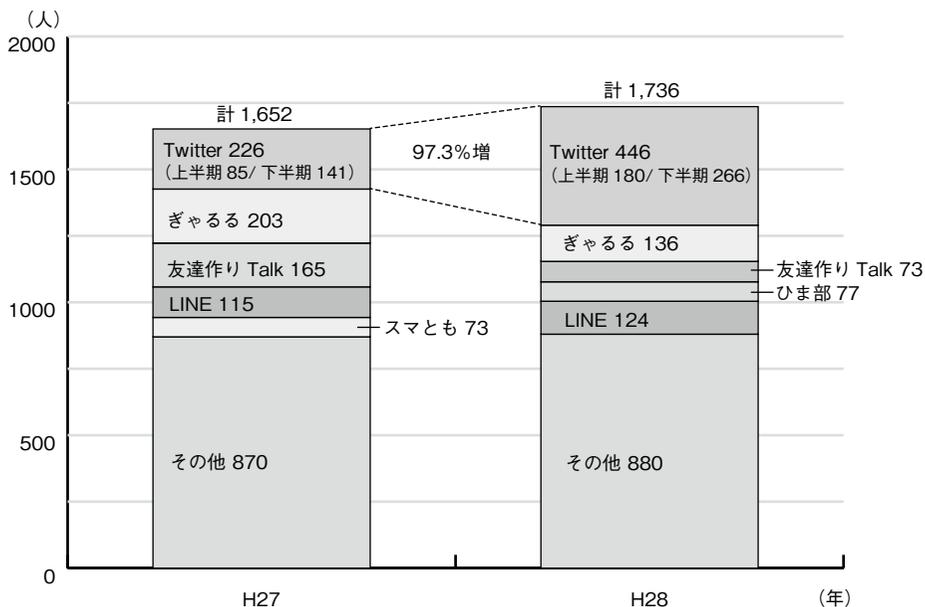


図2 コミュニティサイト等に起因する児童被害において被害児童数の多いサイト  
(出典：警察庁「平成28年におけるコミュニティサイト等に起因する事犯の現状と対策について」)

と重いです。私たちはこういう実態から目をそらすべきではありません。

#### 4. ネットいじめ

平成 27 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省, 2016)によると、いじめとして報告されている事例のうち、「携帯電話等でひぼう・中傷」があったとされているのは 7.8%。「悪口や脅し」の 67.3%と比べると、数字だけで見ると子どもたちに「ネットいじめ」は決して多くないように考えられます。

私は、以前中学校教員(生徒指導主事)としてこの調査の回答者として関わり、その後、市教育委員会の指導主事として集計作業にも関わりました。さらに、大学教員になってからは、多くの自治体の担当者との調査結果をもとに対策を考えています。そのため、この数字の意味を少しは理解できる立場にいると自負していますが、そういう私の私見を書きます。

この数字は、教員が「ネットいじめ」と意識してはじめてそうカウントされます。最近のいじめの多くは、LINE 等の書き込みがきっかけの場合が多いですが、その後リアルな学校生活等でのめ事に発展します。教員が把握するのは、リアルなトラブルになってからなので、ネットいじめとはカウントしない場合が多いです。

さらに、ネットでの攻撃は、いじめの 1 つの手段で、多くの場合、リアルな暴力、無視等と併用されます。指導する教員のインパクトは当然、暴力、無視の方が強いので、結果としてその数が増えます。

つまり、今の子どもたちのいじめで、ネットの役割は、「きっかけ」と「手段の 1 つ」です。結果として、ネットいじめとカウントされるのは少ないですが、実際は LINE 等をきっかけとしていじめがはじまることが多いです。しかし、ネットでの攻撃に対して被害者は 24 時間逃げ場がないので、ダメージは想像以上に大きいです。私は「ネットいじめ」は、今後どんどん増えると予想しています。主な理由は 2 つあります。

1 つ目は「ネット利用の低年齢化」です。ネット利用の低年齢化がますます進みます。低年齢の子どもたちが文字だけでやりとりするのですから、当然、トラブルは多発します。「ケータイ・ネイティブ」に

育てられた「ケータイ・ネイティブ 2 世」が今後、続々と学校にきます。教員は心しておかなければならないでしょう。

2 つ目は「人間関係の希薄化」です。核家族化、少子化、異年齢での遊びの減少等、子どもたちが人間関係を築く経験が少なくなってきています。少ない子どもたちを多くの大人が見ているので、トラブルの経験自体が少ない。当然、「仲直り」「仲裁」のスキルも育ちません。ネットでの些細なトラブルをきっかけに、誰かが集団からはじき出され、誰も仲裁することができません。そういう状況です。

子どもたちの間では当事者(被害者、加害者)はもちろん、周囲の多くもどうしたらよいかわかりません。傍観者は、自分が巻き込まれないように、「空気を読む」ことに徹底します。

#### 5. スマホ時代の大人として

今回は、「ネットいじめ」について記載してきましたが、他にも「ネット依存」「高額課金」「安易な投稿」など、子どもとネットにまつわる課題は山積しています。さらに最近では、子どもたちの間で YouTube 等の動画サイトが大流行し、大きな課題になってきています。

この種の問題の動きは速く、私たち大人はついて行けません。私も当惑してしまうことも多いです。そのため、年間 50 回以上、子どもたちと一緒にネット等について考える機会を作っています。スマホ時代を生きる大人として、特に子どもたちと深く関わる大人として、この問題についてアンテナを高くして、せめて日々「知る努力」をする必要はあるでしょう。また、子どもたちは日々、多くのトラブルに遭遇します。しかし子どもたちの多くが、「先生にだけは相談しない」と話します。

先日、中学生たちと、そのあたりについてじっくり話す機会があったので、その一部を紹介します。

「先生は、スマホと聞くと大騒ぎする」

「食いついて大事(おおごと)にする」

「相談したら勝手に相手を呼び出して指導」

「次の日、学年集会」

「話す内容から、誰がやられたか学年中にバレる」

「そのダメージの方が大きくて不登校」

「あるあるやなあ」

「あと、お母さん呼び出す」  
「ちょっと相談したらいへん」

先日、ある市で行った、「スマホサミット」でのパネルディスカッションの一部です。発言者の多くが、各学校の生徒会執行部員で、特定の「荒れた」子どもたちではありません。むしろ、「先生たちのお気に入り」の部類の生徒諸君です。彼らは冷静にこういう風に見ているのです。恐ろしくなりました。

## 6. 信頼される教師集団であるために

昔の中学生は本当に困ったら、養護教諭に相談していました。妊娠等、センシティブな問題であればあるほど、そうでした。事情が変わってきているようです。保健室の先生についても以下のように話してくれました。

「保健室の先生、LINE って聞いたら逃げ出す」  
「スマホは苦手！ 若い先生に聞いて！ って」  
「でも若い先生に相談したら、すぐ上に上に」  
「次の日には学校中の先生が知ってる」  
「そう、『ハウレンソウ』っていうらしい」  
「あ、それよく聞く！」

ベテラン養護教諭のことは予想の範囲でしたが、「ハウレンソウ」のくだりは驚きました。「ハウレンソウ」とは、もちろん「報告」「連絡」「相談」のことです。私は、初任者研修もよく担当しますが、各県の初任者担当者から、「報告」「連絡」「相談」について強調してほしい旨、頼まれます。もちろん、経験の少ない教員がトラブルを抱え込んで困らないようにするためですが、そういう配慮がこういう形で子どもに伝わっている悲喜劇は想像していませんでした。次回からはこのあたりも一緒に話そうと思います。

子どもたち曰く、「若い先生は、相談したらすぐにベテラン先生に相談する」。「だから危険だ」と言うのです。もちろん、教師全体でトラブル事例を把握することは好ましいことです。最近の生徒指導のキーワードの1つ、「チーム学校」からも明らかなように、教員全体での状況把握は今や必須です。しかし、子どもたちにこのように「すぐに他の先生に言われてしまう」と思われてしまうのは、また別の話です。

子どもたちは、先生方が協力して自分たちのために動いてくれるのはもちろん歓迎します。協力してやってほしいから相談するのでしょうか。しかし、そうであっても、子どもたちに納得させた上で教員が共有する一手間を惜しんでは何のための「ハウレンソウ」かわかりません。

子どもたちは日々、トラブルに巻き込まれています。しかし、ネットの問題では、先生に相談しないことが多いようです。しないのではなく、「相談できない」のだと言います。こういう状況だからこそ、日本中で子どもが重大な事件を起こしてしまうのかもしれない。

スマホ時代を生きる大人として、せめて子どもたちが相談できる大人になりたいものです。その上で、子どもたちと一緒に、スマホ問題対策について考えていくことが重要でしょう。もはや、禁止や制限で対応できる時代ではありません。子どもたちと利活用のためのマナー、ルールを考えていく必要がまずはあります。

---

### 参考文献

- 1) 警察庁「平成 28 年におけるコミュニティサイト等に起因する事犯の現状と対策について」  
[https://www.npa.go.jp/cyber/statics/h28/h28\\_community\\_shiryuu.pdf](https://www.npa.go.jp/cyber/statics/h28/h28_community_shiryuu.pdf) (アクセス日 2017 年 7 月 10 日)
- 2) 文部科学省「平成 27 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/28/10/\\_icsFiles/afieldfile/2016/10/27/1378692\\_001.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/10/_icsFiles/afieldfile/2016/10/27/1378692_001.pdf) (アクセス日 2017 年 7 月 10 日)